

## 現代神学における神の現実存在の問題

— ブラウンとゴルヴィツァーの論争を中心に

上原 潔

### 問題設定

神の現実存在 (Existenz) を巡る問いは、古来、神学の中心的主題のひとつであったと言えるが、中世のヨーロッパに代表されるようないわゆる「キリスト教世界 corpus christianum」を背景としていた時代とは異なり、世俗化の進化した現代においては、殊更に深刻なものとなっている。と言うのも、現代において、神の存在の「自明性 Selbstverständlichkeit」から出発することはもはや不可能となっており、むしろ、そこで前提となっているのは、「このような生きた無神論が今日、思惟を営む全ての意識が持っている自明な出発点となっている」(W・パネベルク<sup>1)</sup>) という問題状況だからである。

もし仮にそうした時代状況の中で、「最初から近代的無神論の現象を問題にしないならば、そのような神についての教説は今日では抽象的な思弁」(G・エーペリン<sup>2)</sup>) にならざるをえないとも言えるだろう。それ故に、二十世紀のプロテスタント神学は、世俗化した無神論的状况の中で、キリスト教信仰はなおも

神を語ることができるとか、またそれはいかなる方法でなされるべきか、その場合、そこで語られる神とはいかなるものであり、どのように存在するのかという極めて基礎的かつ根本的な問いにまで取り組まなければならなかったのである。

第二次大戦後、とりわけ一九六〇年代を中心として行われたそうした一連の議論は、一般的に「神への問い Frage nach Gott」と呼ばれる。本稿の目的は、それらの中からヘルベルト・ブラウン (Herbert Braun, 1903-1991) とヘルムート・ゴルヴィツァー (Helmut Gollwitzer, 1908-1993) の間で交わされた論争を概観することで、現代において神の実在性を思惟する困難さとそこで要点を浮き彫りにし、それに若干の考察を加えることにある。この課題に加えて、こうした論争が、続く時代にもどのように継承されていったのかということも素描したい。

### 一 ブラウンの実存論的解釈

ブラウンとゴルヴィツァーの議論の発端となったのは、ブラウンの論文「新約聖書の神学の問題」(末尾「略号による引用文献」参照)である。本節では、主にこの論文においてブラウンが展開した、実存論的な解釈学による神の現実存在の問題について瞥見する。

当該論文以前に、すでに「新約聖書のキリスト論の意味」(一九五七年)と題された論文においてブラウンが主張していたこ

とであるが、彼の見解によれば、イエスの宣教の核心は次の点にあつたという。すなわち、イエスは一方で、ユダヤ教の律法であるトーラーを、実行不可能なまでに先鋭化した<sup>3</sup>が、しかし他方で、彼は律法を遂行する人間的努力の不必要性を説いた。

そのようにして、ユダヤ教の儀式や律法を忠実に実行できない者にこそ、神は彼らの回心を喜び、祝福を約束したということである。したがって、イエスの宣教においては、神の要求の徹底的な先鋭化——「私は……すべきIch soll……」という事柄——と、徹底的な神の恩寵——「私は……を許されているIch darf……」——が逆説的に統一されているといふ。

ところでブラウンによれば、この逆説的統一は新約聖書の信仰的自己理解の核心でもあるが、ただしそれは、地上のイエスから原始教団を経て、パウロとヨハネのサークルに及ぶ史的伝承を通して形成されたものとは考えられない。しかしそうだからと言って、超時間的な永遠的真理あるいはある種の理念(Idee)とも言えない。そうではなく、それは自身の実存に急迫し「自己理解 Selbstverständnis」を劇的に変革するときに、真理となるという。「それは生起する現象であり、その生起において初めて妥当し拘束力を持つようになる現象なのである<sup>3</sup>。したがって、たとえ史的伝承を媒介としなくても、この逆説的統一が実存に急迫して自己理解を変革し、出来事として生起するところでは、「その当時、ナザレのイエスを巡って起こったことと類比的なこと」が生じているとブラウンは考える。そのように

して、「イエスは、私の『私は……を許されている』と『私は……すべきである』ということの中で、そのつど生起する」(PT 12f.)ことになるのである。

ブラウンの関心は、はたしてこうした出来事が今、日、どこで生起するののかという点に向かう。ブラウンはさしあたって、新約聖書における特定の諸表象に関して、それが今日の人間にとって理解不可能となつてゐることを指摘する。彼は新約聖書の主題を「キリスト論」「救済論」「トーラーに対する立場」「終末論」「スクラメント論」の五つに分類し、それらの中に見られる現代人にとつて理解不能な点を以下のように列挙する。

神論あるいはキリスト論は、ひとりのメシアあるいは主(Kyrios)が存在していることを前提としており、その前提は当時のユダヤ教やヘレニズムの宗教的背景あるいは世界観に立脚している。しかし、今日の人間がそうした前提を、自らの世界観から導き出すことは不可能である (PT 6)。救済論に関しては、究極的な救済 (Endeii) は「新たな大地の上での労苦から解放された生として、ユダヤ教的に表象されるか、神や天的存在者の限られた領域における非地上的な彼岸的状况として、二元論的に表象されるか」のいずれかであるが、「いずれの表象方法も我々にとつては疎遠である」(PT 6)。それらは、「そのナイーブさという点で、我々は信じていることができないし、そのために努力する価値もないものである」(PT 6)。律法に関しては、新約聖書の特定の表象のもとでは、神が発令を下したが故に、それ

が絶対的な拘束力を持つと理解されているが、そうした理解は、「そのナイーブな他律性という点で、我々にとってはほど遠く、とても手の届くようなものではない」(PT 10)。終末論に関しては、新約聖書の中で語られている間近に迫った終末が「誤り Irrtum」であったのは今となっては明白な事実だが、終末を先延ばしにして世界史の終わりに位置付ける場合でも、それは、歴史の始まりと終わりを措定する神、また歴史を導く神の現実存在が「所与のもの das Gegebene」として「ナイーブに受け止められている」ときになしか成り立たないという(PT 10ff.)。祭儀や典礼に関しては、パウロが救済の「物象化 Verdinglichung」に反対したとはいうものの、例えば洗礼がキリストの肉體とながり、パンと葡萄酒がキリストの肉と血に結びつくと考えられる点で、救いは「物的」あるいは「時間的、対象的」に表象されている。しかし、そうした「ナイーブな神思想の地盤」には今日の人間は立脚しえないのである(PT 11)。

ブラウンによれば、これらの新約聖書における特定の諸表象は、「客体的、対象的な思惟 das objektiv-gegenständliche Denken」(PT 12)に由来している。要するに、上述した五つの分類においては、神の存在やその現臨にせよ、救済のあり方やその到来時期にせよ、あたかもそれらが手前に存在し、(vorhandensein)、現実存在する(existieren)かのように表象されているが、「そのような「神の」観察や神思想は、我々にとって不可能とらうことである」(PT 11 括弧内は引用者)。しかし他方で、

ブラウンの指摘によれば、新約聖書の中には、客体的な対象的思惟を打ち破るような諸表象も含まれているのであり、そうした表象が現出する場所こそ、先に述べた逆説的統一——「イエスの出来事 Jesus-Geschehen」——が起こりうる今日的な場所となる。ブラウンがここで指摘するのはいずれも、空間的にせよ時間的にせよ、「主観—客観」図式には収まることのない、内的(immerich)かつ現在の(gegenwärtig)な神理解や終末理解を示す聖書箇所である。結論から言えど、ブラウンによつて、そうした出来事は、人間の実存とその実存、同士の共同性へと還元されることになる。つまり、先に見たように「私は……すべきである」と「私は……を許されている」という逆説的統一は、世界の外に現実存在する神と世界内に生きる人間の直接的関係においてではなく、専ら「共同人間性の枠内で im Rahmen der Mitmenschlichkeit」生起する(PT 13)。そのことによつて、「究極的な救済は、形而上学的ないわゆる神の世界の高みから、正しい共同人間性という世俗的な地盤へと引き戻される」(PT 13c)。伝統的に考えられてきた律法とそれを発令する神の權威も、この正しい共同人間性の枠内で考え直されることになる。その場合、もはや神は人間にとって、他律的に律法を權威付ける者ではなく、逆に、自律的な人間が「良心に従つて、泰然として、確信をもって行動できるという現象の表現」(PT 13)と理解される。終末論に関しては、客体的な対象的思惟によつて把握された場合、間近に迫った終末というものは誤りと判断

されていたが、そうした終末待望がそれを信じる人間の実存に  
いかなる影響を与えるのかという点から新約聖書の証言が検討  
され、その結果、終末待望は、今 (today) という時の充実——カ  
イロス——の側面から把握しなおされることになる。すなわ  
ち、「間近に迫った終末は、そのつど私が語りかけられ、要請さ  
れ、支えられているということ、そうした状態が究極的な妥当  
性の中で満たされており、不可逆的の一回的なものであり、打  
ち消し難く急迫してくるものであるということ」を告げ知らせる  
のである (Pt. 16)。それ故に、「瞬間がその満たされた在り様  
の中で受け止められ、生きられるところには、神が存在してい  
ることになるだろう」(edp) とブラウンは主張する。以上から  
帰結するのは、新約聖書の神学に通底する「定数 Konstante」は  
こうした人間学的状況であり、それとは逆に、そこに見られる  
多様なキリスト論的尊称は、そうした状況においてそれぞれの  
書記者がイエスの出来事に見出した「変数 Variable」というこ  
とになるのである。

このようにブラウンは、ブルトマンの衣鉢を継ぎつつそれを  
徹底し、聖書を極度に実存論的に解釈する。そして神を客体的、  
对象的に思惟することを棄却し、専ら人間の実存とその共  
同性へと神の問題を先鋭化することで、世俗化した無神論的な  
現代世界の中でキリスト教信仰の妥当性を確保しようとする。  
以上のように考えるブラウンにとって、無神論者というものは  
そもそも存在しない。「神とは、駆り立てられている私の状態の

由来 *Wohel*」であり、「神は、私が義務付けられており参与せし  
められているところ、すなわち『私は……を許されている』と  
『私は……すべきである』に参与せしめられているところに存在  
する」のであるから、神は「共同人間性のある特定の在り方」  
ということになる (Pt. 16)。そして、「あらゆる共同人間性は  
……[こうした逆説的統一の] 何ほどかをすでに含んでいる」  
が故に、結論として完全な無神論者は存在しないということに  
なるのである (edp 括弧内は引用者)。

## 二 ゴルヴィツァーのブラウン批判

ブラウンの提案したこの実存論的解釈は、直ちに各方面から  
批評が寄せられ、「激しい対決」を引き起こした。ハインツ・  
ツァールントは当時の状況を次のように解説している。

そのようにして、ここ数年間で、彼「ブラウン」に対する  
教会—神学的な統一戦線とでも言うべきようなものが形成  
された。そこでは、ルター派も改革派も、高教会の人間も  
バルト主義者も、典礼主義者も敬虔主義者も、教会参事会  
員も教授たちも、当該問題以外の彼らの神学的、教会政治  
的、職能的対立は問題にせず、奇妙な戦友関係において  
共存している。単にここ数年間と言うだけでなく、神学史  
上、異常な光景である。

その中でも、ブラウンに対する最も包括的な批判を行ったの

がゴルヴィツァーであり、彼の著書「信仰告白における神の現実存在」〔略号による引用文献〕参照〕は、同時期に行われたW・ヴァイシェーデルとの討論からも刺激を受けてはいるものの、とりわけブルトマンやブラウンをはじめとする実存主義的解釈学に対する、バルト主義者からの体系的な批判の展開と看做すことができるだろう。ゴルヴィツァーのこの文献は様々な問題設定を内に含んでおり、展開される主題も多岐にわたるため、さしあたって本節では、先に見たブラウンの実存論的解釈に対する批判点を取り上げ、その後にはゴルヴィツァー自身の神の現実存在理解を瞥見したい。

ゴルヴィツァーのブラウン批判の矛先は、端的に言つて、次の事柄に向けられている。ゴルヴィツァーによれば、ブラウン——およびブルトマン——の試みにおいては、「神学をヒューマニズムへと解消することが主眼となっており、そのヒューマニズムは、他の様々なヒューマニズムと、ただ哲学的基礎付けと術語によってのみ区別されているに過ぎない」(EB 39)。つまり、ブラウンは神と人間との出会いの出来事を強調するが、その際、彼は出会いの一極である人間の「実存へ」と主眼を先鋭化し、世界内的な地平においてのみ神を語る。確かにそのことで、いわゆる主観—客観図式は克服されたかもしれないが、同時に、出会いのもう一方の極をなす神の現実存在が凋落してしまう(EB 39)。その結果、神と人間との出会いは、人間とその共同体の間でのみ水平的に生起するだけであつて、聖書が物語る神

と人間との垂直的、対向関係(Gegenüber)が完全に度外視されることになる。結局のところ、「神とイエスは、一種のヒューマニズムに解消され、このヒューマニズムにとつては、新約聖書と宣教は、せいぜいのところ追憶的な機能(anamnetische Funktion)を持つに過ぎない」(EB 73)。ゴルヴィツァーにとつては、神と人間との人格的対向関係を人間の側の自己理解の変革という事柄に集中させることは、他者の人格の等閑視につながるような倫理的にも神学的にも欠陥のある方法論にもなりうる危険性を孕んでおり、——神という言葉を最後まで「非神話化」の対象としなかつたブルトマンとは異なり——ブラウンの場合、その危険性が今や現実のものとなつていると考えられているのである(Vgl. EB 26)。

ブルトマンやブラウンの神学的方法論は実存論的解釈であるとされるが、先に見たブラウンの聖書釈義は、そもそも解釈(Interpretation)と呼ぶに値しないものとなつていくという。ゴルヴィツァーによれば、解釈とは当時の出来事を説明し理解する方法であつて、それ自体が目的であるわけではない(EB 45)。(2)。先に見たように、ブラウンは新約聖書における客体的に對象的な神表象を、今日の我々にとつて理解不可能なものとして実存論的解釈から排除し、そのようにして現在の読者の自己理解の変革が果たされることになるとするが、つまりそこでは目的と手段が逆転してしまつていくというわけである。結局のところ、ブラウンの聖書釈義は説明や解釈の枠組みを超えて、聖書の内

容の「修正 Berichtigung」になつてしまつてゐるのである (EB 90)。

先に見たように、ブラウンのこうした実存論的解釈の試みは、突き詰めるならば、無神論者に対する弁証論 (Apologetik) という志向性をその核心に持つてゐる。ところが、ゴルヴィツァーによれば、ブラウンのその試みすらも失敗に終わつてゐる。先に確認したように、ゴルヴィツァーはブラウンの実存論的解釈を「神学のヒューマニズムへの解消」と看做してあり、ここでは、神やキリストという言葉は、人間が人間として生きるための「記号 (Chiffre)」以外の何ものでもない。「神はそこでは我々のために重要であり、根本的には、我々の自己解釈と我々の人倫的自己展開の機能以上のものではなくなつてゐる」(EB 189)。要するに、ブラウンの実存論的解釈は新約聖書の内容を無神論に——あるいは、神やキリストという言葉を用いなくても説明できる一般の真理に——できる限り歩み寄らせる試みを意味してあり、「まさにその点で、ブラウンは文字通りフォイエールバッハや無神論者とも意見が一致しているのである」(EB 75)。ブラウンは、そもそも無神論者は存在するのかと否定的に問うが、無神論者にしてみれば、同じように、そもそも信仰者に存在するのか、あるいは無神論者と信仰者のこのような主張内容の一致にもかかわらず、なぜブラウンは自身を未だに無神論者と看做さないのかとも反問できるだろうと、ゴルヴィツァーは述べてゐる。結局のところ、ブラウンの弁証論は無神論者を納

得させることもできないし、仮に無神論者の同意を得たところで、キリスト教信仰にとつて、それは割に合わない「ユエロスの勝利 Pyrrhussieg」に過ぎないのである (EB 73ff.)。

以上に見たように、ゴルヴィツァーはブラウンの実存論的解釈について、事柄上の (sachliche) 問題は言うまでもなく、方法的な問題、目的論的な問題に対しても、極めて批判的な態度を表明してゐる。上記のブラウン批判からも明らかによつて、ゴルヴィツァーにとつて重要なのは、神と人間の対向関係における出会いの出来事であり、それも認識対象 (神) の主体性によつて、認識者 (人間) が対象の認識に至らせられるということである。したがつて、ゴルヴィツァーの見解では、出会いという現象の前提条件となる神の現実存在は、新約聖書からは抜き去ることのできない基本的要件だということになる。「聖書全体は有神論的であり、そのような言い方にながしかの意味があるとするれば、聖書は前代未聞なほど高度に有神論である」(EB 32)。したがつて、キリスト教信仰も有神論 (Theismus) 以外に立脚する立場をもたないことになるのである (EB 32-37)。

このように、ほとんど正反対の立場に立つブラウンとゴルヴィツァーであるが、両者ともに神を局外中立的な立場で観察の対象にすることができるとする世界内的存在者や、物的対象 (Ding-licher Gegenstand) とは看做さない点で、見解が一致してゐる。聖書に記されている神と人間の出会いの証言は、「その他の全ての世界的、共同人間的な出会いと同一ではない。それは、自己

や世界や共同人間との関係という点で「非同一的なもの Nicht-Identischer」その限りで実際に「まったく他者 Ganz-Anderer」との出会いである」(EB 99)。それでは、世界的存在者とまったく同一ではない神の現実存在とはいかなるものであり、どのようなしてそれと出会うのだろうか。ゴルヴィツァーはこの問いに対して明確な答えを出しているとは言い難いが(詳しくは後述)、おそらくそうした神と人間との媒介を言葉(Wort)と考え、神を「語りかける者 der Anredende」と看做すことで、この問題を処理しているように思われる。ゴルヴィツァーは次のように述べる(EB 103 括弧内は引用者)。

彼ら「聖書書記者」は、最も堅固な対象性において神について語っているが、客体化する語りを……そうした対象「神」に対して相応しくないものとして厳しく退けている。彼らは神を表象している (vorstellen) のではなく、神を聞いている (hören) のである。神は暗闇のうちより呼びかける。つまり、秘密という近寄りがたさのうちより呼びかけるが、そこへはいかなる表象も進入しようと企てることはできないのである。

このように、神と人間との対向関係を世界内的存在者としてではなく、言語的媒介によるものと看做すことで、ゴルヴィツァーは神の現実存在と非客体性を両立させようとしている。もともと、ゴルヴィツァーの想定しているのは、指示対象との間に必然的關係のない記号や符号とは異なる。神の言葉は、語

りかける言葉であり、そこでは語りかける者と語りかける事柄の間に必然的な結び付きが存在する。というのも、語りかける者は、自己自身に何らかの関連を持った事柄を語るからであって、その意味で、語りかける者の存在が外部化され表明されている (äußern) からである。あるいは、語りかける行為は、心理学が説明するように、伝達しようとする事柄を超え出て、語りかける者の内面を吐露する場合すらあるとも考えられるだろう。そのようにして、語りかけられた者は、そちらの側としては語りかける者自身に関与するようになるのである。より具体的に言えば、語りかける者としての神とそれに傾聴する人間との対向関係においては、神から指令 (Befehl) が発せられ、約束が告げ知らされる。人間の側ではそれにふさわしい行為——ゴルヴィツァーが例示しているところでは、「信頼、服従、判決の受容、罪の告白、祈り、問いかけ、感謝、賛美」(EB 99)——が要求されることになる。その中でも、とりわけ重要なのは祈り (Gebet) である。と言つのも、祈りは瞑想 (Meditation) とは異なり、祈りの言葉を、呼格 (Vocativ) を通して送り届け (EB 170) 、その祈りの言葉を受け取るものの現実存在が必須になるからである。祈りの行為を媒介として、神は歴史的に将来を約束し、それを成就する。神はそのようなものであり、そうであるからこそ現実存在しなければならないのである (vgl. EB 174)。

## 三 ゴルヴィツァーの見解に対する批判的考察

ブラウンの実存論的解釈を厳しく批判するゴルヴィツァーは、以上のように自身の神の現実存在に関する見解を開陳した。しかしそのことで、神の現実存在を巡る議論に終止符が打たれたわけではない。本節では、ゴルヴィツァーの神の現実存在理解に対して、批判的考察を二つの側面から展開してみたい。

一点目は、ブラウンの立場から想定される批判的考察である。ゴルヴィツァーの批判に対して、ブラウンは決して自身の立場を変更することはなかったと言えるが、その原因の一端となっているのは、おそらく、ゴルヴィツァーの想定するところの神からの語りかけが、今日の我々にとつてどこで生起するのか、という問題に対して、ゴルヴィツァー自身が直接的に明確に答えを提示していないからであろう。自然法則の因果律に外部から介入し、そのようにして歴史的に奇跡を起こす神を、現代の人間が想定できないのであれば、また、ゴルヴィツァー自身も主張するように、神と人間の間の対向関係が人格的交わりとして生起するのであれば、それは人間の共同性の枠内で生起せざるをえないのではないだろうか。つまり、神の言葉が直接的に人間の耳殻を通して——つまり、物的的に——知覚されるのではないのだとしたら、すくなくとも現代の多くのキリスト教徒にとつては人間共同体の枠組みの中で、あるいはそれを通して間接的に聞き取り、認知する以外にないように思われる。ゴル

ヴィツァーがブラウンの主張を変更させるためには、神が直接的に現臨する歴史的场所を明示するか、共同人間性という水平的超越を媒介としつつも、なおもそこに垂直的超越が介在する余地のあることを説明すべきであったように思われる。ブラウン自身、神を「駆り立てられていた私の状態の由来 *Wohler*」と考えており、その意味で人間共同体の外部を想定する可能性を残しているだけに、水平的超越における垂直的超越という問題設定は議論の共通の地平となりえたはずである。

二点目は、いわゆる啓示神学の立場からの批判であり、それはエバハルト・ユンゲルが『神の存在は生成にある』（一九六五年）において展開したゴルヴィツァーに対する批判である。上述の通り、ゴルヴィツァーは神を世界内的存在者とはまったく異なるものと考える一方で、神は対向的に人間と関係し、歴史的に将来を約束し成就するものと理解している。しかしながら、この点でゴルヴィツァーは神学的にも論理的にもあるアポリアに陥っているという。例えば、ゴルヴィツァーは「世界的な意味で存在と呼ばれるものの観点からすれば、神は『存在』しない。また神について存在すると言われるところの観点からすれば、全ての世界的な事物にはいかなる存在をも認められないのである」(EBS)と述べる。ユンゲルが批判するのは、この引用の前半部分であり、そしてそこから帰結する神学的アポリアである。一見すると、前半部分の見解はブラウンの主張と輻輳するように思われるが、ブラウンと異なりゴルヴィツァーは、



神の現実存在あるいは歴史的存在を他方で主張するためにアポリアに陥っている。つまり、ゴルヴィツァーは、一方で、神が「世界史の一部でもなければ、歴史内の主体でもない」と語り、他方で、その神が「歴史内の主体として登場し行動し語る——その際に、この『として als』とは仮面を付けてというようなことではなく、歴史内の主体という存在様態 (Seinsweise) という意味においてである」(EB 161)と述べるために、論理的アポリアに陥っているのである。

あるいはここに見られる論理的矛盾はさておくとしても、ゴルヴィツァーの主張が正しいとするならば、神の歴史的自己啓示は、「神について存在すると言われるところの観点」からすれば、非存在ということになり、神の歴史的存在を非存在 (Nicht-sein) と看做さざるをえなくなるだろう。また、「世界的な意味で存在と呼ばれるものの観点」からしても、神は——イエスにおいて歴史的に自己を啓示したために——過去に存在した (Gewesen sein) とは言えるかもしれないが、ゴルヴィツァーが主張するようには「それでも神は存在し続ける et tamen Deus manet」(EB 169) とは言えなくなってしまう。つまり、「イエス・キリストの死に直面して神の非存在を語らざるを得なくなってしまうだろう」。

ウンゲルの見解を援用してこの問題を考えるならば、ゴルヴィツァーが陥ったこれらのアポリアは認識論的な歴史的制約、つまり、「主観性の形而上学 Subjektivitätsmetaphysik」と

いう制約を考慮していなかったためと思われる。

この「主観・主体 Subjekt」という言葉は、ラテン語の subjectum に由来しているが、これは元来、ギリシア語の υποκειμενον の訳語である。アリストテレスの使用した υποκειμενον とは、直訳するならば「下に横たわっているもの」である。それは、文法的には様々な述語が属するところの主語を意味しており、存在論的には諸属性の下に横たわっており、それらの諸属性を支え担っている「基体」というような意味を持っていた。近代の初頭に至るまで継続されてきた用法では、「主観」とは本当に存在するもの、人間の心の外に (exoteren) 自存するものを意味しており、むしろ今日我々が使用する「客観・客体」という意味合いに近しかったと言えるだろう。

このような「主観」の意味合いの原義からの反転が、主観性の形而上学と呼ばれるものであり、ウンゲルによれば、それが近代の初頭において起こった。ここでは、人間の自己が、全ての事物の「尺度 Maßstab」となり、全ての存在者を「関係付ける点 Beziehungspunkt」となった。そのことに対応して、存在者の存在者性、実在性は、自己のもとに「現前する」と Anwesenheit、自己に「向かい合っていて立っている状態 Gegenständlichkeit」、自己の「前に立ってられた者 Vor-gestelltheit」、あるいは「手前にあつて Vor-handensein」という意味になる。概括的に言えば、人間主観にとつて現前するものが明瞭かつ判明に存在するものと看做されるようになった

たのである。<sup>11)</sup>

こうした認識論的な歴史的制約の下では、ゴルヴィツァーがまさに指摘するところであるが(BB 21-22)、カントやブラウンのように神の現実存在を理論理性ないしは認識論的対象性の枠外に設定するか、あるいはユンゲルや彼のバルト解釈のように、神が自身の意志に基づいて世界的対象性(受肉したロゴス)ともなり得る存在構成を取っていることを、神論において首尾一貫して論理展開するかという二者択一に迫られると思われ。それ故に、前者の選択肢を退け、十字架の神学——我々のもとで(unters uns)他の人間と同様に痛み苦しむことのできる神を前提とする神学——を神学的方法論として採用したユンゲルは次のように考える。すなわち、ゴルヴィツァーがこの神学的アポリアに陥ったのは、「神の存在概念をただちに三位一体論的に正確に規定して、まさにその規定の中で、神の存在の歴史性についてのテーゼを固持することを放棄した」<sup>12)</sup>ことに由来している。要するに、ユンゲルによれば、神の存在は内在的に三位一体構造を取るが故に力動的なものであり、自らの決断のもと他者すなわち世界へと脱目的に存在し(ekstatisch)、経綸的に到来することのできるものであると考えられなければならないのである。ユンゲルにとつてバルトの神論的要諦は、こうした神の自己対象化の可能性を論じることにあつた。したがつて、ゴルヴィツァーは神の現実存在を認識論的対象の枠外に設定する選択肢を否定したが、かといって神の自己対象化という

バルト神学的な選択肢も貫徹しえなかつたことで、先に見たアポリアに陥つたと考えることができるだろう。

#### 四 論争の継承とその実践的意義について

——結びにかえて

以上で、ブラウンとゴルヴィツァーの見解を概観し、その後ゴルヴィツァーの見解に対する批判的考察を若干ながら展開した。最後に、この論争が続く時代にどのように継承されていったのかという点を指摘することで、結びにかえたい。

すでに紹介したように、この論争は現代のドイツ・プロテスタント神学を代表する神学者であるユンゲルに引き継がれ、「神の存在は生成にある」をはじめとする諸著作を生み出すきっかけとなつた。また他方で、ブラウンのように神学を人間学に解消する方向でもなく、バルトのように神の現実性(Wirklichkeit)を絶対的な起点として神学を構想する方向でもなく、上述したような人間学という水平的地平から出発して、垂直的超越を志向するW・パネンベルクや、自然という地平を再びプロテスタント神学の枠組みの中心に据えるJ・モルトマンに代表されるような自然神学構想の再燃に大きな刺激を与えたように思われる。

そして、なによりも留意されなければならないのは、このような一見するとアカデミックな議論が、実践的な方向に継承さ

れていった点である。ともすると高度に思弁的とも思える議論を展開するゴルヴィツァーが、他方で、政治神学の分野で大きな業績を残したことは、いわゆる「属格の神学」が乱立する一九六〇年代以降の神学史を考える上で、重要な事柄であると言えよう。ゴルヴィツァーに限らず、彼からも影響を受けているD・ゼンやモルトマンのように、理論的考察が単に学術的な事柄に留まり実践から乖離するのではなく、神学理論を基礎として実践的な方向へと自ずと推移してゆくことは、教会を「生活の座 Sitz im Leben」のひとつとする神学にとって適切な展開であると思われる。

他方で、ブルトマンやブラウンの実存論的解釈学もまた、別の意味で実践的な影響力を持っていると言える。それは、上述のように近代以前とは異なり神認識が困難になった現代において、キリスト教徒から不要な贅きを取り除くことで、キリスト教信仰から離れてゆくことを防ぐとどう実践的意義である。ハルトやゴルヴィツァーの神学は、神と人間との対向関係を直接的に描き出すという点で、神学の中心の事柄(Sache)に忠実であると言えよう。しかし、彼らの啓示理解はときどき——とりわけ教会に対して懐疑的だとなつてくる——信仰者の不要な贅きになる場合もあるのではなからうか。そうしたハルト神学の絶対化の問題に直面して、ブルトマンあるいはブラウンの神学は、ひとまずキリスト教信仰に留まり、自身の足元から再びキリスト教信仰に関する考察を始める契機を産み出す実践的効

果をもつていられると思われ<sup>15)</sup>。そうであるからこそ、思想的な継承はなくても、一定の思想的背景を整うところでは、ブラウンが展開するような議論とそれを巡る論争はらうでも行われるのである。

#### 神学上の引用文献

- ・PT: Herbert Braun, Die Problematik einer Theologie des Neuen Testaments, in: *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, 58. Jg., Beiheft 2, 1961, S. 4-18.
- ・EB: Helmut Gollwitzer, *Die Existenz Gottes im Bekenntnis des Glaubens*, München, 1963.

#### 註

- (1) W. Pannenberg, Die Frage nach Gott, in: ders., *Grundfragen systematischer Theologie. Gesammelte Aufsätze*, Göttingen, 1979 (3. Aufl.), S. 361.
- (2) Gerhart Ebeling, Elementare Bestimmung auf verantwortliches Reden von Gott, in: ders., *Wort und Glaube*, Tübingen, 1960, S. 359.
- (3) H. Braun, Der Sinn der neutestamentlichen Christologie, in: *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, 54. Jg., 1957, S. 344ff.
- (4) イエスから原始教団を経て、パウロへと続く史的伝承に

- 聞じつて、*らわぬ*のバルトマン派にあらうとも意見の分かれぬとらるべからば、このよびに考ふるバルトマン自身とマンマンに對して、E・ケーギンは批判的留保を促してゐる (Vgl. E. Kasemann, *Sackgassen im Streit um den historischen Jesus*, in: *Exegetische Versuche und Bestimmungen II*, Göttingen, 1964, S. 31-68.)。
- (5) H. Braun, a.a.O. S. 371.
- (6) E. Jünger, *Gottes Sein ist im Werden*, Tübingen, 1986 (4. Aufl.), S. 1.
- (7) H. Zahnt, *Die Sache mit Gott. Die protestantische Theologie im 20. Jahrhundert*, München, 1990 (9. Aufl.), S. 350. (括弧内は引用者)
- (8) 例え、ホルヴィツァーとヴァイシエーデルが交互に行つた一九六三／四年冬学期のロロキウムを参照のこと。H. Gollwitzer und W. Weischedel, *Denken und Glauben. Ein Streitgespräch*, Stuttgart, 1965.
- (9) Vgl. H. Braun, *Gottes Existenz und meine Geschichtlichkeit im Neuen Testament. Eine Antwort an H. Gollwitzer*, in: Erich Dinkler (Hrsg.), *Zeit und Geschichte. Dankgabe an Rudolf Bultmann zum 80. Geburtstag*, Tübingen, 1946, S. 399ff.
- (10) E. Jünger, *Gottes Sein ist im Werden*, S. 4.
- (11) E. Jünger, *Gott als Geheimnis der Welt—Zur Beginn-*
- ung der Theologie des Gegenwärtigen im Streit zwischen Theismus und Atheismus*, Tübingen, 2001 (7. Aufl.), S. 164. ちなみに、エンゲルの「主観性の形而上学」理解の基本路線は、M・ハイデッカーのそれと極めて近似してゐる。例え、次の文献を参照のこと。Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd. 6, 2, *Nietzsche II*, Frankfurt am Main, 1997, S. 124-148.
- (12) E. Jünger, *Gottes Sein ist im Werden*, S. 7.
- (13) ちなみに、エンゲルにとつても政治的な事柄は殊更に重要なものである。詳細は、以下の文献を参照のこと。拙論「國家と教會の關係を巡るE・エンゲルの神学的考察について—K・バルト神学との比較を中心として—」『キリスト教思想と國家・政治論』現代キリスト教思想研究会、二〇〇九年、七五—八八頁。確かに、西側諸國の神学者に比べて、エンゲルはDDRを出自とするために抑制は効いてゐるとはさうものの、バルト神学を巡つて「神学主義と政治主義」(大木英夫)との争ひに加わり、前者の立場を採つてゐるわけは決してなからぬ。エンゲルに見られる「神学主義」への批判に関しては、以下の文献を参照のこと。大木英夫「バルト」(人類の知的遺産 72)講談社、一九八四年、三一六—三三三頁。
- (14) 笠井恵二『バルトマン』(人と思想 46)清水書院、一九九一年、四頁。

- (15) 現在では、たとえフラン・キネーゴットの著作や、彼も参加している団体 Sea of Faith が挙げられるだろう。ドン・キネーゴットの問題は、その文脈を参照のこと。  
Don Cupitt, *Taking Leave of God*, (New York: Crossroad, 1981); *Emptiness & Brightness*, (Santa Rosa, CA, Polebridge Press, 2001).